増補 小説のなかの〔エス〕の世界

大森 郁之助

……

三千子も上着を取りに、教室への廊下を真先に駈けて行くと、不意に薄暗い窓際から、背の高い痩せたひとが近寄って来た。ふと驚いて立ち止る三千子に、ネイビイ・ブルウの封筒を手渡して、

「ごめんなさい、あとでね……。」

そして、仄白い顔をちらと見せたきり、いそいで曲り角へ消えてしまった。

1 花選び

いわゆる少年少女小説作家でも通俗小説の作家でもないのに三十七巻本全集（新潮社）中の二巻を少女小説が占める[*1]川端康成が、自分の少女小説の代表作とし、事実版を重ねることも最も多かった「乙女の港」（昭13）の冒頭、フランス系カトリックの「基督教女学校（ミッションスクウル）」一年生の三千子と、五年の洋子の出会いの場面である。この舞台設定に

ついては「官立の女学校よりも、生徒同志の友情がこまやかで、いろいろな愛称で呼び合っては、上級生と下級生の交際が烈しい」と説明され、同じ作者の「花日記」（昭14）にもその裏返しに、女主人公の学校が「官立だけに」「エスとか、オディアとかの交際も、派手ではない」とある。エスはシスターの頭文字、オディアはOh dearの略。ただし「オディア」の方は川端作品以外には見当たらず、実際の旧制女学校生徒間の同性愛めいた交際でも「エス」がもっぱらであったようだ。

しかし、「派手ではな」く「校内での手紙のやり取りにしたって、全くの秘密主義で、エスのエの字も知らない顔をして、そのくせ相当流行っている」（傍点引用者）と続き、本人も間もなく〔妹〕を獲得しているから、ミッション云々は有れば尚更良い条件の一つだが無ければ無いで又それなりの味わい、といったところだったか（例えば宝塚とSSK、OSKの違い？）。

話を戻して、三千子が教室に入ると「机の上に、色濃い匂いの菫の花が、小さな束に結んで載っている。はっとして机の中をあけると、教科書の上に、紫インクで書かれた、真白な封筒がひとつ……」、つまり同時に二人の上級生から呼びかけられたわけである。

一般に事の発端は上級生の方から、手紙で、というのが普通のようで、下級生としては精々上級生の目にとまるよう付きまとう（吉屋信子「花物語」『露草』、大13）程度、例外的に、まもなく勤労動員で離れ離れになる戦時中の女学校で、勇を奮って上級生の下駄箱に手紙を（津村節子「茜色の戦記」、平4）というのがあった。

ところで、最初の日のうちに「もう洋子に妹の心を寄せた三千子は、どうしても克子（菫の花の四年生）をただのお友達としてより、深くは思えな」くなっているのだが、そうと知らない級友の非難を浴びたりもする。ここで、

登場人物は女学生だが対象読者は大人の小説まで話を拡げれば、エスの関係は「一夫一婦みたい」で、上級生下級生に一人ずつの「愛人」（合計二人）を持つのはかまわないが上なら上だけに複数持つと生徒間の制裁があるきまり（木々高太郎「わが女学生時代の罪」、昭26）、という恐ろしい説明も見られる。複数持つまでには至らない段階の、後からの割り込み・押しのけ行為に対しても、「乙女の港」では四年の克子の割り込みに洋子の級友が「五年有志」の名で抗議し、「花日記」には片思いの間に先を越された級友のいやがらせが描かれている。

とはいえ、争奪戦に勝ち嫉視に耐え、というのはあくまでスパイスであり、エス小説の本体部分は、例えば三千子が「一生、お姉さまをひとりしか持ちませぬように……」と「自分の胸のうちに」誓い、一日のうちに「一度もお姉さまに会わないで帰るの、いや」と啜り上げる、あるいは、〈多情〉を冷やかされた三千子が『『知らないッ。』と、頬を染めて、瞼を落すのを見ると、洋子は、三千子がもう自分ひとりのものになったと」幸福感に胸顫える、といった、〈二人の世界〉の歓びと恍惚（「わが女学生時代の罪」のヒロインは「もうふりかえって惜しむようなものを残さない」女学生時代の「満喫」と回想している）――に、読者もあずかること――である。この関係を錯覚（？）すると、たとえばかの「君の名は」が逢う瀬を妨げるすれ違いを強引に繰り返して通俗恋愛ドラマの代名詞化されるに至ったように、少女同性愛小説を確立した功績で少女小説史からは外せない「花物語」も、とって付けたような災難や不自然なまでの悪役の設定によって（だけではないが）作品としては文句なしの低俗視が定着してしまった。

さて、エス同士にとっての、障害という程ではなさそうだが気がかりは、ライバルの他にもう一つ、親や教師の警戒心があった。生徒と女教師の組み合わせに対するような明確な禁止（川端「朝雲」昭16、「足袋」昭23、「花物

語」中の『黄薔薇』？など）ではなくとも、二人で校門を出る時ばったり出会った先生が「あたし達の方を、きつく見つめ」たので「胸がどきどきする」（「花日記」）とか、「二人ぎりで御友達にな」るなんて「お母さんに叱られると思う」（石坂洋次郎「若い人」、昭12）などとある。

もっとも、その理由はというと、例えば昭和十三年に内務省図書課が示した出版物検閲の要点の一つに「同性愛……の魅力を強調せるもの」と挙げられているような反・醇風美俗観、また、いずれ結婚すべき身の心理的（及び身体的？）障害となっては、という、産めよ殖やせよの国策からの心配くらいしか、思い浮かばないのだが、一口に同性愛といってもエス小説では殆んどが恋愛でいうプラトニックにとどまっている。かろうじて、「ふたありは、もう禁制の木の果の甘さを知ってしまった――今さら知らぬ昔に、どうして返り得られよう」（「花物語」『日陰の花』）とか、卒業して行く洋子と心が通い合う「だけじゃ、頼りない」「お姉さまの体の傍にいたいの」という三千子の訴えが、示唆して（後者はその萌芽を）いるか、という程度である。「わが女学生時代の罪」で、少女同士の間が「肉体的の愛情まで入っていた」のに片方が男性の恋人も作ったため、もう一方が妊娠してしまう（！）というのは、やはり成人向け小説（しかも推理小説、ただし作者は医博・慶大医学部教授）ゆえの例外的深化とすべきだろう。となると、エス小説での親や教師の警戒（――への、当事者の用心）は、現実のエス行動は知らぬこと、小説中のエス関係とは少々不釣り合い（もっとも釣り合うように描くわけには行かなかったろうが）ということになりそうだ。

さて、今さっき、エス関係を上級生下級生一人ずつと持つのは云々と述べた。男女の間で見れば年上妻もロリコン男もいる（当然、それぞれに対応する相手も）ことから類推できるように、女性同士の間でも〔お姉さま〕型と

〔妹〕型の二タイプがあろうが、同時に、年下夫がオフィスではロリコンという例も想像不可能という程ではあるまいから、一人の少女が相手により〔姉〕とも成り〔妹〕とも成る、なりたいと願うことがあっても、不自然・非現実的とは言い切れまい。もっとも、エス小説の長篇というのはそう多くなくて、短篇では同一人物の二態は盛り込み易くはないから、自ずと実例は少なくなるが、「花日記」では、かなりに〔お姉さま〕的でもあった実姉が嫁いで行ってしまった淋しさから、残された妹は学校で下級生の〔妹〕を求める。

上方に生じた空白を下方で埋めようというのはあまり判り易くないが、じつはこの実姉も、早く母を失ったため「幼い頃から、(妹に対して、母の代わりの)姉の心を持って育って来た」「お姉さまに甘えることは知らなかった」という〈上方空白〉感の自覚があり、女学校入学早々に現れた上級生に急速に心を寄せて行った過去を持つ。つまり実姉は、女学校低学年において学校では〔妹〕、家庭では姉かつ〔姉〕という、同時二役の時期を持ったわけだが、前述その妹の〔妹〕捜しには、実姉の古い日記によって〈「嘘の」姉・妹〉というものに眼を開かされたことも作用していた。

ただし、言うまでもあるまいが、〔姉〕になろうと〔妹〕になろうと本人の人柄は変わるわけではないものの、人間関係論風にいえば求められる役割は異なって来る。

そもそも少女小説における同性愛モティフの根源的な意味については、川村湊氏に「異性を排除した『姉-妹』の関係を純化することによって、自分たちのユートピア、女の花園をつくろうとし」、「封建的な父母による子の支配ともいうべき『家』とは別の形の、同性、同世代の人間による共同生活という理念を」示したもの、とする説がある(「妹の恋――大正・昭和の〝少女〟文字」、『幻想文学』二十四号)。この把握に拠ってこれを見るなら、その

〈反・家庭〉～〈反・現実社会〉的、ほとんど空想的な集団を、異質な外部に対して護り支えるかたわら内を統べねばならない（――ことになる）〔姉〕に望まれるのは、女性としての凸型理想像（チェーホフの〈可愛い女〉式・凹型理想像と逆向きの）に近いものとなろう。上級生＝年上なのだから自然当然にといった成り行き式認識では、個々の作品論、作中人物論においても意外な見落とし見誤りを生じかねまい。げんに同じ学校の同学年で一方が他方を「私の義妹（シスター・イン・ロー）」と称している例（石坂「暁の合唱」、昭16）もあるのだから。

だが、それなりに――年齢相応には浅からぬ悲喜を織り成すエス小説も、時間的な決着はやや侘びしい。卒業（多くは、一方の）というセミコロンが、おおむね、ピリオドに同じいのである。

「乙女の港」では、それでも、より分別がある筈の洋子まで、卒業を目前にして「浅くて変りやすいという、女同志の友情」を「あたしと三千子さんだけは、きっと永久に保ってみせる」と決心し、三千子が「これから、土曜日の晩には」「どんな差支えあっても、きっと、三千子を思って、お手紙書くと、約束」をせがむと、まじめにうなずく。しかし「花日記」では、〔妹〕を得たばかりの女学校二年の女主人公さえ、「嘘の」という冠称に象徴されるように「女学校の『姉妹ごっこ』」はお嫁入りする頃には「卒業」しているもの、という、醒めた認識を持っているし、げんに実姉も、そのことを綴った日記は保存していたものの、かつての〔お姉さま〕のその後の消息は全く知らないもののようである。同じ作者の次の長篇「美しい旅」（昭17）では〔姉〕の女学校卒業後の女高師入学までは知っていたが、そののち意外な職場にいるのを発見して再燃、というのは結構だが、逆にいえば、偶然がなければそれきりだった筈ということだ。「若い人」には修学旅行で上京した〔妹〕を今は医専在学中の〔姉〕が出迎える場面が

あるが、これは例外的なのではないか。

いささか感傷的にいえば、この時代、平均よりは恵まれた生まれ育ち（女学生という身分が。後述）でもその感情を活かせるのは少女期、結婚までが精一杯、という、戦前女性の人生の現実が、フィクションでも逸脱は空想さえなし難かったということか。〈女の悲しい宿命〉調の徹底が悪名高い「花物語」では、全五十二篇（女学生同士のいわば狭義エス物はむしろ少数派だが、広く少女間関係として）中に、〈歓びの再会〉や〈再燃〉は一件も存しないのである。

そして、作中のエスの終焉としての女学校卒業に対応するような、エス小説そのものの終焉、少なくとも甚だしい衰退――片隅化と変質が、昭和敗戦によって訪れる。新制中学・高校への転換に伴なった共学化（女子校として残っても、校門を出れば世間の風俗・空気の）が、閉ざされた世界の内で充足されるべき制度的規制と心理的自然とを、共々、消滅乃至は極度に稀薄化させた。

数の中には依然として同性に引かれる個人や特定の面はあっても、一般かつ全人的に異性よりも同性に向かわせる外的事情は甚だしく弱まったから、大多数の者は別の、世間普通の＝つまり自ずと向きやすい方向に目を向け、あるいは、機能その他の適不適・便不便によって幾つかの面でだけ同性に向かうという、より合理的、単純・淡白な人間関係へとスライドして行ったのだが、それが良かったか悪かったかは今措く。[*2]

ただ、現実習俗としてのエスはともかくその小説化の消長の一要因としては、前記、衰因の裏返しの、かつての〈女学校〉の閉鎖性（くりかえす、その是非は保留）ということの他に、そこに存した何程かの優越感（プライド）[*3]、第三者の羨みや憧れという要素も無視してはなるまい。広義〝女学校〟[*4]中で制度的に最も高レベルの「高等女学校」

への進学率は、統計のとり方でかなりの幅があるが、その一つとしては明治末で約3％、大正末10％、昭和十五年に14％という数値も出る。[*5] ともかく現在の大学短大進学率より遙かに低かったことは間違いない。その彼女らの生き方、控え目に云っても生態は、それを描こうという気持にとっても、描かれた自分（の仲間）達を見直そうという気持にとっても、それに値いするものに映っていたのではないか。少なくとも現代の学園物よりは、間違いなく。

この後半の推測には歴史的根拠がある。

男性の同性関係が中・近世にお伽草子の稚児物から西鶴まで多くの作品に描かれた、その基盤は寺院の僧たちの女人禁制の集団生活とされるが、一方、起源的には尼寺もそれほど差はないのに、女性のそれは殆ど生まれなかった。[*6] そして明治末期、「魔風恋風」（明36）を前駆として「あきらめ」（明44）でようやく本格的に描かれたレズビアン・ラヴは、二作共、現在の学制にあてはめるなら〈女子大〉生を主人公としたものだった。この〈時期〉と〈人物設定〉とは偶然ではなく、明治三十四年の日本女子大学校開設が〈女学生〉の集団生活（学舎ならびに寄宿舎での）への世間の好奇心を一挙に高めた（これは定説）ことと無関係と考えるのはかえって不自然だろう。[*7] これを要するに、ある生活や習俗が存在しても、その行われている〈場〉が世人の関心を引くに至ってはじめて新たな題材となり得る、という、言ってみれば極く当たり前のことであって、げんにその後も、同じ習俗の実在が『女工哀史』（大14）などにも明記されている紡績工場を舞台としたレズ小説が流布することは遂になかった。

エス小説がもてはやされ、さらに少女小説以外にも同じモティフが出没するにいたった（前述）ことは、習俗としてのエス自体が獲得していた何程かの社会的ステイタスへの死後叙勲をも促す筈である。

註

＊1　より正確にいえば第十九・二十巻が少年少女小説篇で、内、二十巻の全三篇と十九巻の全二十二篇中十五篇とが少女小説である。

＊2　小稿「要略・日本近代小説の《貝合せ》」（札幌大学総合論叢五号、平成十年三月）ならびに「川端康成・《少女伝説》の終焉」（同　三号、九年三月）Ⅱ章、それぞれ参看。

＊3　たとえば「エス」「オディア」と称したこと自体にも、旧制高校生から弘まったというMädchenや敗戦直後の窮乏期に学生達が転用したというArbeit, あるいは伝説的〈女学校〉たる明治女学校（明18～41）にあったというevol（「愛」の逆綴）等の語と、創出者の客観的エリート度には大差があっても使用する気分には類似するところがあったのではないか。ちなみに授業科目としての「英語」は〈女学生〉にとっては、高等女学校においてさえ（次註参照）、明治三十二年の高等女学校令公布以来新制中・高校への転換による消滅まで一貫して、必置必修科目でなかった。

＊4　全体に複線型だった旧学制は中等教育において最も錯綜し、大まかに女学校と呼ばれた（少なくとも教育関係者以外にとっては他の呼びようは思い浮かばなかった？）ものも法規上は①高等女学校令に拠る高等女学校（略称高女）②高女令に拠るが家政系科目が中心の実科高女③高女令に拠った場合の宗教教育禁止等の規制を嫌い、あえて「高女に類する各種学校」にとどまったもの（プロテスタント系ミッションスクールや独自の教育方針を持った名門校が多く、卒業後の資格も殆ど高女と同等）④実業学校令に拠る女子商業・家政女学校等――に分かれ、おおむね①・③→②→④といった序列づけがなされていた。エス小説の舞台としても①または③なら最もムードは好いわけだが、あまり明確にされていないことが多い。

＊5　いわゆる女学校が前註の各種に分かれる上、高等小学校を経て入学する課程もあって、尋常小学校～女学校間の進学率算出は極めて複雑になる。ここにはごく大まかな目安として、文部省『学制八十年史』（昭29）付載「教育統計」中の各年度高女在籍生徒総数の四・五分の一（高女は一貫して四または五年、例外的に三年制）を、前年度尋小女児数の六分の一で除してみた。

＊6　レズ一般に拡げれば若干の古川柳が残っているものの、男性の場合のような散文小説形式の作品は皆無といっ

てよいようである。

このことについては小稿「『魔風恋風』・幻の《義姉妹》考」（札幌大学女子短大部紀要二十二号、平成五年九月→有朋堂版『考証少女伝説』）に詳説した。

＊7 ただし、時くだって大正以降のエス小説がもっぱら〈女子大〉より一段階低年齢の女学校を舞台とするのは、単純に当該課程校の急激な増加からでも説明はつこう（女学校より上級の学校を舞台とするものも川端「女学生」《昭10》等有るには有り、また、現実習俗においても消滅したわけではなかったことは日本女子大四十三回生文集編集委員会『戦いの中の青春』《昭50》収録の一文にも例証がある）。

なお、本稿前半は雑誌『アクタス』（北国新聞社）平成十年七月号（特集・女学校の秘密）掲載の同題稿を補訂したもの（後半が今次の新稿）。故高橋教授と本稿筆者との接触は、平成八年十一月、新学部赴任予定メンバーの二度目の顔合わせの二次会々場で、本稿とは従姉妹稿の関係（本稿の方が、妹）になる「『乙女の港』・その地位の検証」（女子短大部紀要十七号、平成三年二月）を「読みましたよ」と声を掛けられたのが、最初だった。その由縁の本稿を以て献花に代える所以である。

（平13・1・10）